

Title	民初紀年考
Author(s)	竹内, 弘行
Citation	中国研究集刊. 1989, 7, p. 21-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61000
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

は、その後の中華民国の複雑な歴史をくぐりぬけ、今も台湾に年として年次を表記する方法(以下「民国紀年法」と略称する)

民初紀年考

はじめに

一九一一年に起った辛亥革命は、秦漢以来二千年の専制君主体制に終止符を打った。そして、その専制君主体制に付随した体制に終止符を打った。そして、その専制君主体制に付随した本制に経済を表示を表示した。これは、二つのことを意味した。一つは、中国においてはじめて太陽暦が正式採用されたこと、もう一つは、中国においてはじめて太陽暦が正式採用されたこと、もう一つは、中国においてはじめて太陽暦が正式採用されたこと、もう一つは、それまでの年号に代って国名がその役目を負うようになったこと、この二つである。年号の成立からこの時の廃止まで、ほぼ二千年間の歴史とその意味づけについては、別に止まで、ほぼ二千年間の歴史とその意味づけについては、別に止まで、ほぼ二千年間の歴史とその意味づけについては、別に止まで、ほぼ二千年間の歴史とその意味づけたれた。 さた歴史は、ここで、いったん終止符が打たれた。 ところで、中華民国(以下「民国」と略称する)誕生年を元本を元を記された。 本名の本のである。年号の成立からこの時の廃止まで、ほぼ二千年間の歴史とその意味づけについては、別にできた。

年に魯迅と章炳麟、字は太炎によって使われた紀年法を紹介し、にも多くの紀年法が提唱され、利用された。本稿では、民国三その命脈を保っている。しかし、民国出現の前後には、この他行 内 弘 行

新生民国が採用した民国紀年法は、政府公報等には単独で誌 新生民国が採用した民国紀年法は、政府公報等には単独で誌 が魯迅で、では「太蔵在閼逢摂提格九月既望」とした。閼逢は十干の甲、 では「太蔵在閼逢摂提格九月既望」とした。閼逢は十干の甲、 では「太蔵在閼逢摂提格九月既望」とした。閼逢は十干の甲、 では「太蔵在閼逢摂提格九月既望」とした。閼逢は十干の甲、 では「太蔵在閼逢摂提格九月既望」とした。閼逢は十干の甲、 では「太蔵在閼逢摂と国教育部に勤務していたが、一九一四 をおり、歳星は木星のこと。 古代では天空を十二分し、その年の木星(正しくはその影)の 古代では天空を十二分し、その年の木星(正しくはその影)の とした。閼進は十平の甲、 では「太蔵在房逢摂と園紀年法は、政府公報等には単独で誌

その含意する思想的意味について私見を述べてみたい。

ずに古めかしい太歳紀年法を使用したのだろうか。歳紀年法」という)。いったい何故、魯迅は民国紀年法を用い

せた」魯迅ならではの態度であるとみられるのである。 魯迅がもはや民国の年号を称する気にならなかったのは、清末 袁が憤死したので、再び共和制に復した)。こうした状況で、 暗殺し保守化を強めた。同年六月には孫文らが袁世凱に反対す を継いだ正式大総統衰世凱は、革命に背を向け、民国二年三月 二朝に仕えない意志を同様な年代表記で示したと同じく「現執 として認めない、換言すれば「現執政袁世凱の治世を否認する 記すなわち黄帝紀年法などを使用していた「その意識を持続さ の革命派が、清朝の年号を拒否し黄帝即位を元年とする年次表 反袁護国の役すなわち第三革命がひき起されて、そのさなかに て、民国の実質は、袁世凱の独裁に近づいていた(事実、一九 る第二革命を発動させたものの、袁世凱によって鎮圧されてい に孫文とならぶ革命指導者で、当時国民党理事だった宋教仁を いた」ものとみるのである。というのも、民国臨時大総統孫文 政権に荷担することを拒否する抵抗の態度を秘かにあらわして 意識があきらかにはたらいていた」ためで、陶渊明や顧 る。それは、魯迅の尚古的な趣味の表現ではなく、民国を民国 一六年民国五年に帝制を施行し、年号も洪憲元年とされたが、 これについては、すでに先人によって次のように説かれて 一炎武が

てそのとおりであったろうか。

_

年法に固執することこそ、革命的であり民国の内実を守る立場で活に固執することこそ、革命的であり民国の内実を守る立場に、 本のである。のち袁世凱が、この民国紀年法を捨てて洪憲年号をもち出した事を考えあわせても、むしろ民国紀年法の利用こそ革命意識の継承となる。その好例が、前民国紀年法の利用こそ革命意識の継承となる。その好例が、前民国紀年法の利用こそ革命意識の継承となる。その好例が、前民国紀年法の利用こそ革命党を組織したが、その党員への誓約書位は「民国三年七月八日」と民国紀年法と従って、結党の日付けを付しているのである。のち袁世凱が、この民国紀年法を捨てて洪憲年号をもち出した事を考えあわせても、むしろ民国紀で当対しているのである。のち袁世凱が、この民国紀年法を捨てて洪憲年号をもち出した事を考えあわせても、むしろ民国紀で当ました。

育部の役人だった魯迅であった。「会稽郡故書雑集序」はこのとのこれで、大大学を担当したのに、同年九月には袁世凱の異志を見らの露払いを務めたとされる康有為らの孔教会が、この民国三年の露払いを務めたとされる康有為らの孔教会が、この民国三年のこれを表し、政策を担当したのに、である。しかも袁世凱帝制第二に、顧炎武や陶渊明が二朝に仕えなかったのと相違して、第二に、顧炎武や陶渊明が二朝に仕えなかったのと相違して、第二に、顧炎武や陶渊明が二朝に仕えなかったのと相違して、第二に、顧炎武や陶渊明が二朝に仕えなかったのと相違して、第二に、顧炎武や陶渊明が二朝に仕えなかったのと相違して、第二に、

に通じるように思われるのである。

表記にもそのような意図を読みとって不思議ではないが、果し

中国革命史上における魯迅の高い評価を考えれば、右の年次

年十一月の作である。

第三に、魯迅は、自分の書いた「会稽郡故書雑集序」を同じ第三に、魯迅は、自分の書いた「会稽郡故書雑集序」を同じます。これを「名利を弟に譲った」美談としていて、ともに当たのがのりにといた。兄の魯迅は、について、弟の周作人がのちにこういっている。兄の魯迅は、について、弟の周作人がのちにこういっている。兄の魯迅は、たっいて、弟の自分に譲ったものであると。同様に、魯迅の友人許名声を弟の自分に譲ったものであると。同様に、魯迅の友人許名声を弟の自分に譲ったものであると。同様に、魯迅は、自分の書いた「会稽郡故書雑集序」を同じ第三に、魯迅の政治意識には言及していないのである。

第四に、当時魯迅が書いた序跋中の年次表記をみてみると、第四に、当時魯迅が書いた序跋中の年次表記を示すの言識の持続があられるのだろうか。ちなみに、孫文らの反袁第二革命は民国三年に「雲谷雑記序」(甲寅三月十一日)一篇の合計三篇がありともに民国紀年法を利用してはいない。これらの序跋文のありともに民国紀年法を利用してはいない。これらの序跋文のありともに民国紀年法を利用してはいない。これらの序跋文のありともに民国紀年法を利用してはいない。これらの序跋文のありともに民国紀年法を利用してはいない。これらの序跋文のありともに民国紀年法と、明本に、当時魯迅が書いた序跋中の年次表記をみてみると、第四に、当時魯迅が書いた序跋中の年次表記をみてみると、第四に、当時魯迅が書いた序跋中の年次表記をみてみると、第四に、当時魯迅が書いた序跋中の年次表記をみてみると、第四に、当時魯迅が書いた序跋中の年次表記をみてみると、第四に、当時魯迅が書いた序跋中の年次表記をみてみると、第四に、当時魯迅が書いた序談中の年次表記を記述した。

歳紀年法を使用した理由はまったく別な事情があったとみるべ以上の諸点から考えて、魯迅が民国三年十一月にわざわざ太

きではなかろうか。

=

民国三年十一月に、魯迅が「会稽郡故書雑集序」を書いて、民国三年十一月に、魯迅が「会稽郡故書雑集序」を書いた翌年の民国四年(一九一五)、浙江省の浙江図書館より『太炎文録』と題して刊行していた。

るのである。

・ の『太炎文録』に収められた作品の中に、実は、年次表記のである。

戌政変によって日本へ亡命し、一九○○年の自立軍起義事件にれる湖南省出身の革命的士人であった。彼は、一八九八年の戌沈蓋(一八七二Ⅰ一九○三)は、沈禹希とも沈愚渓とも言わ

て殺された(詳しくは『新民叢報』第三五号参照)。動に従事中に逮捕され、一九〇三年七月三十一日、杖刑によっも参加していた。のち北京に赴いて中露密約の暴露など反清活

戊戌政変後に台湾に亡命しのち中国に帰り、この年、

上海で刊た。彼も、

章炳麟は、このニュースを上海租界の獄中で知った。

訴えたものである。章炳麟が、右のような因縁のある文章の、 波相続けば、誰れか継ぐ亡しと云わん」とその後に続くことを たのだろうか。章を改めて検討しよう。 れぞれ異名である)とわざわざ変えた理由は、 なって、他でもない太蔵紀年法による「歳在昭陽単閼、月在室 特にその昌頭の「黄帝四千六百十四年秋七月朔」(一九〇三年 政変の犠牲者譚嗣同、自立軍起義の犠牲者唐才常らを継ぐ章炳 た。内容は、晦淡で難解な辞賦体を用いて、沈蓋の行為を戊戌 の為に書いたのが「沈藍を祭る文」すなわち「沈蓋哀辞」であっ が、同年八月二十三日に、上海で挙行された烈士沈衋の追悼会 の沈蓋の死を人一倍傷んだであろうことは想像に難くない。 書」を発表、「革命軍」を発表した若き鄒容(一八八五ー一九 行されていた新聞『蘇報』に「康有為を駁して革命を論ずるの 八月二十三日)という日付けを、十余年たった民国三ー四年に ○五)とともに逮捕、投獄されていたのである。章炳麟が北京 (昭陽は十干の癸、単閼は十二支の卯、 室相は七月の、そ いったい何だっ 彼

改筆した時の状況、および沈藍の行動と章炳麟の行動の二つのは何もいっていないが、この文章の書かれた状況と十余年後に年法によるそれに変えられた。その理由について、章炳麟自身存法によるそれに変えられた。その理由について、章炳麟自身衰辞」の冒頭の年次表記が筆者章炳麟の手によって、当初の革良国四年(一九一五年)刊『太炎文録』に収められた「沈藍民国四年(一九一五年)刊『太炎文録』に収められた「沈藍

類似性が、ヒントになるように思われる。

るものがあったと思われる。それが、 かつて「沈蓋を祭る文」と題した文章は、 を選んでいるからである。この為、北京で軟禁中の章炳麟には、 を組織して戦うことより、 は、さきにもふれたとおり孫文や黄興のように後方にて革命軍 と十年後の北京で軟禁状態のそれとも共通点があった。 若き論客鄒容の方であったが。また、この上海の獄中の章炳麟 のである。上海の獄中で実際に死んだのは、ともに投獄された しかも『蘇報』に発表した文章で投獄され、死と隣あっていた 死を知った時、章炳麟もまた亡命地から中国にまいもどって、 犠牲となった唐才常そして単独北京入りで刑死した沈蓋。彼の 位置づけてよいだろう。戊戌で死を選んだ譚嗣同や、 誰れか九世(の仇)を復さん」とある、その死者の側に二人を に「死者あらずんば、誰れか民気を伸さん。生者あらずんば、 後者の章炳麟と沈蓋との類似性についていえば、 自己犠牲を覚悟した直接的批判行動 題を「沈蓋哀辞」と変え、 何より彼の心に訴え 「沈蓋哀辞 自立軍で 章炳麟

改めることになった動機の一半であろう。その年次表記についても革命派の黄帝紀年法から太歳紀年法に

聞き知っていた可能性は十分あるのである。それのみならず、も和刻が出るほど流布した書物で、章炳麟自身も、直接みたり、 その銭謙益が注釈した『大佛頂首楞厳経疏解蒙鈔』は、日本で 批判されているが、そのすこし前の一九○○年に刊行された章 亡べば之に聴う」態度や精神が清朝を延命させてきたと厳しく を論ずるの書」では、銭謙益のように胡虜に降って出世しなが 報』に発表して蘇報事件の発端となった「康有為を駁して革命 二様の評価を下していた。すなわち、章炳麟が一九〇三年『蘇 章炳麟は、この満州王朝に仕えた銭謙益について、次のような 帝から「二臣」の烙印をおされ抹殺された人物である。だが、 も礼部右侍郎・明史館副総裁等に拝され死後百年たって、乾隆 である。銭謙益は明朝の礼部尚書でありながら、清朝に降って 経』を注釈し、その序文にこの太歳紀年法を使用しているから 益(一五八二ー一六六四)が、官を辞して帰郷後に仏典『楞厳 鼎革の際に異民族満州王朝に降伏して清朝の高官に昇った銭謙 使用に関しては逆のことも言えるのである。というのは、 で示したと言われている事を紹介したが、実は、太歳紀年法の 陶渊明や顧炎武が二朝に仕えない意志を年号を使用しないこと 法でなければならなかったのかの説明にはならない。 一言の建白や補助もなく、「其の存すれば之に聴い、其の 右の理由だけからは、なぜ改められたものが太歳紀年 さきに、 明清

たというのである。

えた銭謙益も、「尽く瘁れんや」と、認めるに値する点があったな銭謙益も、「尽く瘁れんや」と、認めるに値する点があったが、一王朝に対して節操を守らなかったと非難できるだろうれが、一王朝に対して節操を守らなかったと非難できるだろうれが、一王朝に対して節操を守らなかったと非難できるだろうれが、一王朝に対して節操を守らなかったと非難できるだろうい。古くは夏王朝の滅亡に際して殷に走った太史令終古、殷末に周に奔った師摯、新しくは隋唐の儒者陸徳明、孔頴達らは、「身を以て礼楽儒術を衛り、其の汚れを衉えず。此れ誠に溝瀆「身を以て礼楽儒術を衛り、其の汚れを衉えず。此れ誠に溝瀆「身を以て礼楽儒術を衛り、其の汚れを衉えず。此れ誠に溝瀆に経れて之を知るなし」とあるによる)の能く跂てる所にあるなり」として、二臣でも儒教の継承という大目的の為なりが説、認めてよいという。従って、五代の馮道や明清二朝に仕らば、認めてよいという。従って、五代の馮道や明清二朝に仕らば、認めてよいという。従って、五代の馮道や明清二朝に仕きない。

『別録』に追いやられていて、今日では彼の思想的変質を示すず、多くの章の筆になる革命論文が、他ならぬ章炳麟の手で行された。この「康有為を駁して革命を論ずるの書」のみならうに指示したのに、出版者側で勝手に『太炎文録』に収めて刊がまいという文章は、そっくりそのまま収められた。他方、臣もよいという文章は、そっくりそのまま収められた。他方、臣もよいという文章は、そっくりそのまま収められた。他方、臣もよいという文章は、そっくりそのまま収められた。他方、臣もよいという文章は『文録』がいるので、との関係を表示を記述の意味があった。軟禁中の『太炎文録』編纂に際して、のは、後者であった。軟禁中の『太炎文録』編纂に際して、のは、後者であった。軟禁中の『太炎文録』編纂に際して、のは、後者であった。

ものと言われているのである。

だとすれば、章炳麟が、ひとり北京で刑死した沈藍を思いやりながら、二臣の評のある銭謙益が利用したと同じ太歳紀年法りながら、二臣の評のある銭謙益が利用したと同じ太歳紀年法の法であったし、孫文や黄興のように袁世凱を打倒する「反袁」であったし、孫文や黄興のように袁世凱を打倒する「反袁」であったし、孫文や黄興のように袁世凱を打倒する「反袁」であったし、孫文や黄興のように袁世凱を打倒する「反袁」であったし、孫文や黄興のように袁世凱を打倒する「反袁」であったし、孫文や黄興のように袁世凱を打倒する「反袁」であったし、孫文や黄興のように袁世凱を打倒する「反袁」であったし、孫文や黄興のように袁世凱を打倒する「反袁」であったし、孫文や黄興のように袁世凱を打倒する「反袁」であったし、孫文や黄興のように袁世凱を打倒する「反袁」であったし、孫文や黄興のと言ってよいであろう。だとすれば、ことすれば、章炳麟が、ひとり北京で刑死した沈藍を思いやりながら、二臣の評のある銭謙益が利用したと同じ太歳紀年法の世間とない。

五

袁世凱に仕えた(魯迅は今もって仕えている)、いわば「二臣」は共通するところがあった。ひとつは、ともに革命を裏切った中にも、魯迅は章炳麟を見舞っているのである。二人の心中に中にも、魯迅は章炳麟を見舞っているのである。二人の心中に中にも、魯迅は章炳麟を見舞っているのである。二人の心中に中にも、魯迅は同じ浙江省の出身であることは、さきに述べ章炳麟と魯迅が同じ浙江省の出身であることは、さきに述べ

い。そのことは、魯迅の書いた「会稽郡故書雑集序」の内容がいていえば、章炳麟は、すでに国学大師の名声を有して、数多いていえば、章炳麟は、すでに国学大師の名声を有して、数多い自己の著作を収拾すれば、国学の保存になった。ところが、い自己の著作を収拾すれば、国学の保存になった。ところが、い自己の著作を収拾すれば、国学の保存になった。ところが、にとであった。これもまた立派な国学大師の名声を有して、数多いとであった。これもまた立派な国学大師の名声を有して、数多いとであった。これもまた立派な国学の保全と継承に他ならない。

たこと)して中断したばかりか、 る。すなわち、中途で、游学(一九〇二一九年の日本へ留学し たという。これだけなら、とりたてて国学保存ということでも た。以来、自分の故郷会稽の古書の遺篇を蒐集するようになっ 刊行した書物をみて、「故郷を篤恭う」とはこのことかと思っ はじめて先賢の伝記を書き、朱育が土地の記録を残して以来、 内容を紹介し、つづいて、その由来を、三国時代、呉の謝承が 雄弁に語っている。 ないが、魯迅は続いて次のような遍歴のあったことを記してい た。自分は若い時に甘粛省武威県出身の学者張樹(一七八二ー が記録されるまでになったが、唐末五代の混乱で湮滅してしまっ め、編して集を成し、以て旧書の大略を存するなり」と全体の 『隋書』経籍志には、雑伝篇に四部三八巻、地理篇に二部二巻 一八四七)が、故郷凉州(甘粛省の古名)の古人の著作を蒐集 序文はまず「『会稽郡故書雑集』は、 明哲の論を聞いて「郷土を誇 史伝・地記の逸文を取

確な継承とみるべきではないかと思われる。

国学や伝統の保存、護持ならばよしとする、

章炳麟の立場の明

3

う。むしろ、革命派と切れて袁世凱政権に仕えながら、それが

否認や清末革命派の意識の継承ではなかったことは明瞭であろ

右のような序文の内容からも、魯迅の意識が、袁世凱政権の

ている。「この故に(古人の)名徳を序述し、其の賢能を著し、る有様だった。これでは、誇飾するどころか風土の悪化に陥っる有様だった。これでは、誇飾するどころか風土の悪化に陥ってなど歴史遺跡の残っているところが、士女の遊び場となって、践など歴史遺跡の残っているところが、士女の遊び場となって、践など歴史遺跡の残っていると、馬王や越王勾践など歴史遺跡の残っている。「この故に(古人の)名徳を序述し、其の賢能を著し、東京には、大雅の尚が所にあらず」と思ってやめたというので飾するは、大雅の尚が所にあらず」と思ってやめたというので

(山)陵(川)泉を記注して、其の典実を伝え、後人をして穆

格、九月既望、会稽□□□記」として終っているのである。然として思古の情あらしめんとす」るというのである。然として思古の情あらしめんとす」るというのである。然として思古の情あらしめんとす」るというのである。然として思古の情あらしめんとす」るというのである。然として思古の情あらしめんとす」るというのである。然として思古の情あらしめんとす」るというのである。然として思古の情あらしめんとす」るというのである。然として思古の情あらしめんとす」るというのである。然として思古の情あらしめんとす」るというのである。然として思古の情あらしめんとす」るというのである。然として思古の情あらしめんとす」るというのである。

なく、弟周作人の名前とした理由ではなかったか。だとすれば、 える孔子祭の祭司をせざるを得なかったことも含めて、儒教の 彼の民国初期の役人時代が、袁世凱の儒教復活の露払いともい はなかったためではないか、と推測している。周知のように、 師の章炳麟的な立場を、魯迅が心から納得して受けいれたので ら出たものではない。この点については、私は、さきにふれた 譲ったというのが、関係者の証言ではあるが、魯迅自身の口か 太歳紀年法の採用は、 はなかったか。それが太歳紀年法を用いながら、自己の名前で 伝統を率直には認められない、迷いや疑いのなかにあったの おいて魯迅は伝統儒教を「吃人礼教」と激しく批判している。 の名前にしたのだろうか。弟に伝統学術の護持者という名誉を 一九一七年から雑誌『新青年』でくりひろげられた文学革命に 最後に、 魯迅はなぜ、この「会稽郡故書雑集序」を弟周 魯迅の苦淡にみちた選択であったように

注

思われる。

1

国名を年号として紀年する方法は、太平天国のときに既に

- 反動、傍流とみられている。② 年号は、この民国成立以後も、出現した。袁世凱の「洪憲」例があり、孫文もそれを意図的に継承したものであろう。
- 例えば、中華仏教会の機関誌『仏学叢報』では、民国紀年

の機関誌『孔教会雑誌』にも民国紀年と「孔子(生後)××と「釈迦牟尼仏応世××年」とが並記されていたし、孔教会

年」とが並記されていた。

(13)

- ⑥ 林田慎之助著『魯迅のなかの古典』、一九八一、創文社、
- 一九一一年十月十日の武昌起義のおりの湖北軍政府の公布は、⑧ この継過については、別に詳しく論じたい。が、ここでは、なかの古典』を読む ──」、一九八一、『創文』第二一○号。 中野美代子著「乱世のなかの古典 ── 林田慎之助『魯迅の
- たい。後に陽暦と民国紀年法の採用が決定したことを指摘しておき後に陽暦と民国紀年法の採用が決定したことを指摘しておき黄帝紀年と旧暦の日付けであったが、同年末の孫文の帰国前
- 及び竹内実著「魯迅と孔子様」、一九八一、『世界』一月号康有為論』第三章参照。魯迅と孔子祭については『魯迅日記』⑨ 康有為および孔教会と袁世凱の関係については拙著『後期

周作人著『瓜豆集』所収「関於魯迅」、一九三七、》照。

宇宙風

10

人民文学出版社、五二丨三頁。
① 許寿裳著『我所認識的魯迅』所収「関于弟兄」、一九七八、社、二二二頁。

誌・刊本によって次のように変化している。 - 章炳麟の「祭沈蠱文」は、その題と文章冒頭の紀年が発表

A「祭沈盡文」黄帝四六一四年『沈盡』(一九〇三、単行本)語・干才に『・でおの』を必ずしている

B「祭沈禹希文」黄帝四三九四年『浙江潮』(一九○三、第

(一九○四、第四集) ○「上海公祭沈愚渓国士文」年次表記ナシ『国民日日報彙編 ○ 「 」

行本第二巻) D「沈虀哀辞」歳在昭陽単閼 『太炎文録』(一九一五、単

よるがここでは詳説しない。 AとBの黄帝紀年の表記の違いは、基礎とする論拠の相異に

の先駆的論考がある。銭謙益の太歳紀年法の用例は例えば益と東林」「居士としての銭謙益」「銭謙益と清朝『経学』」の・銭謙益に関しては、『吉川幸次郎全集』第十六巻に「銭謙

困敦は子の異名。西暦一六六○年のことである。日、敬他老人謙益、焚香再拝、重記歳月」とある。上章は庚、『大佛頂首楞厳経疏解蒙鈔』の目録末に「上章困敦歳三月三

はわからない。 年『清議報』第三十冊に発表した「儒術真論付録菌説」があ年『清議報』第三十冊に発表した「儒術真論付録菌説」があ

22

21

頁。 章炳麟「駁康有為論革命書」(一九〇三年)注⑫、二〇六〇

◎ 『太炎文録』の「駁康有為論革命書」題下に「是首本編入

頁参照。 湯志釣編『章太炎年譜長編』、一九七九、中華書局、五一○別録。今姑从右文社印本」とある。この当時の章炳麟評価は

翌年三月の宋教仁暗殺事件後、辞職した。) 章炳麟は民国元年十二月、「東三省籌辺使」に任じたが、

所であった。『魯迅全集』第十四巻、一九八一、人民文学出謁章師」とある。この銭糧胡同が章炳麟の軟禁されていた場」『魯迅日記』、民国三年八月二十二日の条に「至銭糧胡同、

)張澍著『二酉堂叢書』のこと(未見)。版社、一二四頁参照。

⑫、三四頁。また⑫『魯迅全集』第十巻、三二頁。

24)

23

生活』、一九八五、同朋舎参照。一九七九、天津人民出版社、および竹内実著『周樹人の役人一九七九、天津人民出版社、および竹内実著『魯迅在教育部』、

(29)